

HELLO!
SENPAI

「おすすめで
地域をつなぐ
食堂づくり」

おすすめ食堂まこと代表
陶山 智美さん

Contents

【研究のススメ!】
防災にも「楽しさ」と「コスパ」を!
新たな視点で広がる防災

【研究のススメ!】
IoT・ICTで
障害者をサポート

【高知大学 人物図鑑】 けん玉の魅力を学校で活かす!

【カケル大学】 高知県×地域DX共創部門

Kochi University TOPICS

Kochi University 75th Anniversary
Project Information



地域協働学部 総合科学系
地域協働教育学部門 教授
おお つか さと
大槻 知史

京都府出身。立命館大学大学院政策科学研究科後期博士課程修了。博士(政策科学)。立命館大学非常勤講師、タイ・タマサート大学客員講師などを経て、2009年、高知大学に着任。その他、民間企業での業務や高知県内自治体での防災教育アドバイザーなどの経験を持つ。



全国で初の津波避難シェルター
室戸市佐喜浜の都呂津波シェルターにも泊まりました



避難者は畳の上で眠ることができる上
畳の下には救急箱や水が備蓄されている

防災にも「楽しさ」と 「コスパ」を！ 新たな視点で 広がる防災

2人の研究者がともに目指す
防災のカタチ

毎年のように、さまざまな災害に見舞われる日本。

高知県では、南海トラフ巨大地震が想定されています。

地域協働学部の大槻知史教授と藤岡正樹教授はタッグを組んで、防災の研究や検証を行っています。合言葉は「楽しみながら防災」。



大槻先生の専門は、コミュニティ防災や防災教育です。いまは多くの人が、防災の知識が豊富です。しかし、知ってはいても、それを行動に移していない。やらなきゃって気持ちから、やるっていつとこまでなかなか進みません。そんな人たちの背中を後押しするにはどうすればいいかを考えています。

一方の藤岡先生は、数理モデルを用いた避難シミュレーションやBCP(事業継続計画)が専門。どのように避難をしたら効率的なのかという研究をずっとやってきました。防災の研究は役に立ってなんぼという、実学の側面が強い。実用をイメージしながら続けています」とスタンスを話します。

2人はともに防災の講義を担当。さらに共同研究による論文を発表し、地域でさまざまなプロジェクトも実施しています。防災に

キャンパ気分
避難タワーで夜を明かしたら…

「楽しみながら防災」というコンセプトは、2人が担当する「地域防災入門」という講義にも反映されています。

2021年冬の夜、海沿いの津波避難タワーに集まった学生や教員、地域の防災担当者、講義の中で学生が考えてきた災害への備えを実際に検証するため、タワーで一晩、過ごしてみようという実地研修です。それぞれが必要だと思っ道具を用意し、早々にテントに入る学生もいれば、使わずに寝ようとする人もいたといいます。



通学路を歩きながら危険な場所を学ぶ
防災散歩



津波避難タワーでの宿泊体験

防災

実はつながっている高知の課題
防災も暮らしの一部としてまとめて考えることで
解決のアイデアが生まれる！

●防災×子どもの成長



中学校での防災ワークショップ



小学生が運営する防災キャンプ

●防災×地域との交流



備蓄野菜の収穫体験



子どもと創る防災演劇
(シアターTACOGURAとの連携)

●防災×ツーリズム



教育旅行での避難所運営体験

住民のつながり

産業の活性化



地域協働学部 総合科学系
地域協働教育学部門 教授
ふじ おか まさ き
藤岡 正樹

兵庫県出身。慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程修了。博士(環境情報学、政策・メディア)。地域防災・企業防災が専門。東京工業大学研究員、東京工科大学非常勤講師などを務めたほか、防災ゲームソフト開発のため起業も。2016年に高知大学に着任。

してしまつのではなく、多くの人が関わることによる効果があるのです」と藤岡先生はプロジェクトを振り返ります。

こうして生まれた手動起震機は、県内外ですでに500人を超える人が体験しているといえます。「手動で揺らすので、例えば子どもを乗せて親が揺らすというような体験の形になります。子どもはスリルを楽しみながらも、実際に揺れたら怖いねと感じる。揺らしていた親も、子どもの様子を見ながら備えることの大切さに思いが至る。切り離された怖い体験ではなく、自分たちが動かすからこそ、地震を自分ごととして捉え、対策をしなきゃという気持ちになりやすいと思います」と大槻先生もプロジェクトの広がりを感じています。

現在2人が力を入れて取り組んでいるのが、手動起震機の水害バージョンである水害を体験する簡易モデル開発の共同プロジェクトです。目指すのは、河川災害をイメージした事前避難を促すようなモデルのローコストでの実現。設計を藤岡先生が、モデルを使うた教育プログラムを大槻先生が主に担い、意見交換しながら進めていく計画です。早期避難につながるモデルを普及させ、被害を減らすことができればと意欲を見せます。

実践はアクション・リサーチという研究方法に近く、社会が抱える問題に対し、研究者とともに当事者が解決策を考え、検証し、解決策を導きます。体験した学生の気づきは大きく、避難生活被災生活への備えの具体性がぐんと上がりました」と宿泊実習の成果を話す大槻先生。結局、大槻先生のキャンプ好きに学生を巻き込んでいるんじゃないの」と藤岡先生が難ぜ返すと、「先生だって床に直寝して楽しんでたじゃん」と和気藹々としたやり取り。こういった会話からも、「楽しく防災」を実践していることがうかがえました。

今年の冬は、須崎市の避難高台での宿泊実習が予定されています。地元の児童や生徒とともに高台と避難タワーをキャンドルや灯りで彩るなど、地域の人の関心を集めるような工夫も計画。もちろん、両先生ともに楽しみにしています。



手動起震機で揺れ体験

を提供し、「できた」という子どもの自己肯定感を育むことで、生徒自身の防災の能力も上がっていきます。研究者が研究として完結



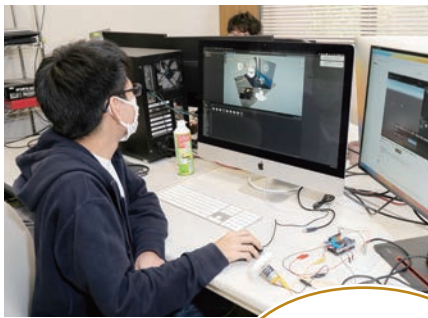
●スピーカーアレイ
視覚障害者の視覚に代わって音で物の動きを伝える
感覚代行システム被験者はスピーカーの前に着席する



マイクロコンピュータが
仕込まれたスピーカー



コンピュータで設計・
デザインした形を
3Dプリンターで制作する

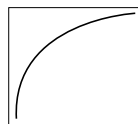


順番に流した音が
視覚障害者に図形として
認識されている結果が
見てとれる

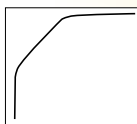
				8	9	10	11
			7				
		6					
	5						
4							
3							
2							
1							

1から11の順番に音を流す

被験者の回答



Aさんの回答



Bさんの回答

こうした最新のナビゲーションや
通知の機能は、白杖には直接取りつけない仕組み。試験段階である今は、機器をまとめて背負って、白杖を自由に使えるようにしています。

64個のスピーカーを使い 音の動きによって 図形情報を伝える

「目の見えない人にとって、音は非常に重要な情報です。スピーカーアレイで音の位置を動かしながら流すと、音が移動していく形を理解することが出来ます。スピーカーの数を増やしたり、密集させて置いたりといろいろ試した結果、少しだけ間隔を空けて、縦8×横8の計64個のスピーカーの組み合わせがベストだと落ち着きました」

各スピーカーのなかにはマイクロコンピュータが仕込まれており、コンピュータの指示によって音を出す仕組みだそうです。用途としては、理数系の教育などに利用できるとのこと。

「例えば、投げたボールの軌道に沿って音を流すと、放物線の動き方がわかります。触図と併用することにより、こうした図形情報の理解が深まると考えています」

IoT・ICTで障害者をサポート

●令和7年度に新設 大学院理工学専攻 「情報科学・データサイエンス・ DX教育プログラム」

このプログラムでは、データサイエンスを基盤とし、情報科学とその周辺の理工学分野との融合を図り、新たな知を創造します。

修士課程2年間の教育研究により、「数理的理解力・思考」×「高度な情報技術力」を兼ね備え、将来、情報科学・データサイエンス・デジタル・DX分野を牽引し、地域・国からの課題解決の要請に応えることができる人材を育成します。

第2次募集

出願期間
(2024年)
12月17日(火)～19日(木)

第3次募集

出願期間
(2025年)
2月12日(水)～14日(金)



プログラムの
HPはこちら



理工学部 情報科学科
自然科学系 理工学部 教授
もり いちろう
森 雄一郎

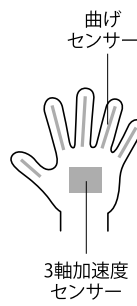
明治大学工学部卒業、博士課程工学研究科電気工学専攻修了。博士(工学)。専門はファジィ理論。センサー付きグローブの技術に応用した会陰保護技術習得のための装置開発も。「以前、心筋梗塞を発症し、体が不自由な人にはコンピュータの最新技術が必要だと気づき、本格的に研究に取り組むようになりました」

「将来的には、知的障害者の支援という方向が考えられます」と、森先生はその先も見つめています。

「ファジィ」とは1990年の流行語大賞にもなった言葉。「曖昧さ」という意味があり、コンピュータが苦手とする曖昧な部分を扱う理論体系だそうです。「主観やクセなど、人それぞれの個性に合わせられる」人に優しい「理論」ともいえます。このファジィのコンセプトから発想し、IoT・ICT技術を使った障害者支援をテーマに研究を進めています」



●手話トレーニングマシン
センサーを装着した手袋を使って
手話の動きをオンラインで学ぶことができる



とても大切なコミュニケーション手段です。しかし、日常的に必要な人であれば、習得している人はなかなかいません。「特定の人が使うだけでは、社会的に使う言語として馴染まない。そこで障害者ではなく、健常者が手話を勉強するためのトレーニングマシンを作ろうと考えました」

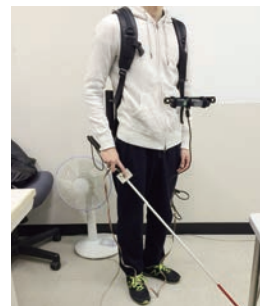
危険をいち早く検知し 白杖を使う人が安全に 歩けるようにサポート

手話トレーニングマシンの次に取り組んだのが、白杖型歩行支援デバイス。目の不自由な人が使う白杖に、高性能のデバイスを併用し、より安全に歩いてもらうというものです。最も重要な情報は、危険物を察知すること。「視覚障害者にとっていちばん怖いのは、踏み外して落ちることだそう。そこで、落ち込みを検出する機能を真っ先に開発しました」

●白杖型歩行支援デバイス

進路上の障害を検知し振動モーターと音声アナウンスで視覚障害者に知らせる

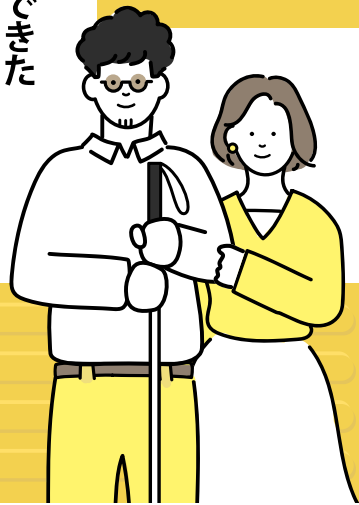
グリップを持つ → 腕を左右にかざす → 障害物があるかを検知 → 振動



障害物との距離		
遠い	1.5～2.0m	弱
↓	1.0～1.5m	中
近い	0.5～1.0m	強

横方向に照射しますが、あえて縦方向に照射するのがポイントです。空間を縦に輪切りにして、歩く先に上り階段があるのか、下り階段があるのか、といったことを検知します」

危険を使用者に伝える機能も大切です。検知したことを次々に発信すると、どれが重要な情報なのかかわからなくなります。そこで、危険な情報のみ伝える機能にしました。「伝え方については風を体に当てたり、振動で教えたりと、いくつかの方法を試してきました。いま最も有効だと思われるのが電気ショック。電極を体につけて、本当に危険なときにビリッとさせる方法です」



曖昧な情報を扱う「ファジィ理論」に取り組んできた
理工学部の森雄一郎教授。その独特のコンセプトに基づき
最新のIoT・ICTを駆使した障害者支援の
研究を進めています。

研究の ススメ!

高知大学の研究の
「今」をご紹介します。

vol.12

活躍する高知大学の先輩に
会いにいきました！

HELLO! SENPAL

Vol.6

農林海洋科学部卒
おすそわけ食堂まど代表
陶山智美さん

「おすそわけ」で 地域をつなぐ 食堂づくり

食品ロスにショック！ 捨てられる野菜を活用したい

高知大学の卒業生、陶山智美さんが切り盛りする「おすそわけ食堂まど」は、人口4000人ほどの山里、香美市香北町にあります。民家を改装した素朴なたたずまいで、コンセプトは店名通りの「おすそわけ」。地域の農家などからわけていただく食材を使った、ヘルシーな料理を提供しています。陶山さんに、どういう思いから「まど」を開いたのかを聞きました。

私の出身は、農業が身近な鳥取県の中山間地域。中学時代、飢餓や食糧問題に興味を抱いたこともあり、県内の農業高校に進学しました。はじめは青年海外協力隊に興味があったのですが、耕作放棄地の問題を知り、中山間地域の活性化に関心を持つようになりました。

独創的な「おすそわけ食堂」を 在学中にオープン

さまざまな経験をして将来の目標が変化した陶山さん。普通に就職するのにも「くない」。そこで3年生の終わりに、自分のやりたいことをリストアップし母親に相談。そのリストには農業や林業、大学生になって免許を得た狩猟のこと、廃棄野菜を利用した「まど」につながる食堂の構想も入っていました。

母親に相談したところ、「いっぺんにはできないから、ひとつに絞りなさい」と。確かにそうだなと、本当にやりたいのはどれだろうと改めて考えたら、直感的に「まど」だと思ったんです。いまままでにない食堂を形にしてみたい、と進路を決めました。

本来は廃棄される食材を有効活用する「おすそわけ」に、地域の子どもや親子が集まる場とする「こども食堂」の考え方も加えました。構想が固まったのは4年生の春。「おすそわけ食堂まど」と名づけ、2020年9月から高知工科大学近くのカフェを間借りし、夕方以降のみの営業でスタート。「まど」という名の意味のひとつは地域の人が集まる窓口になりたいということ。それに「円」も「まど」と読めることから、地域におすそわけの連鎖が起きて、ぐるぐる回るといいなという思いも込めています。

食材については、知り合いに農家さんを紹介してもらったり、子ども食堂に食材を寄付している市場さんにいただいたり。オープン後、テレビや新聞に取り上げられ

大学では中山間地域について勉強した

い。こう考えているうちに目にとまったのが、地域のなかに入って学べる高知大学です。入学当初のころは、卒業したら農業をしたいと思っていました。でも、農家さんでアルバイトやインターンシップを経験しているうちに、気持ちが変わりました。袋詰めをして出荷した野菜が返品されてきたり、売れ残りや規格外で捨てられる野菜があまりにも多いことにショックを受けたんです。

おいしく食べられるのに、大量に捨てられるなんて、本当にもったいない。何とかできないのかなと、そちらのほうに関心が向くようになりました。使われない食材を活用できないかと調べてみると、そういった視点で事業をしている人はほとんどいない。それなら自分がその仕事をやってみたい、世の中の役に立ちたいって思うようになりました。



日替わり定食

るようになってからは、地元の農家さんにわけてもらう割合が増えていきました。

子どもの居場所をつくり、 フランチイズ化も視野に！

陶山さんは3年生のときまでに、単位はほぼすべて取得済み。農業経営に関する研究室に所属して、「まど」や子ども食堂をテーマに卒論に取り組みます。学業と並行して「まど」の営業に励みますが、収益的には少々厳しかったといいます。

夜しか営業できないので、やはり利益を上げるのは難しく、ほかにいい物件を見つけたいと思っていたところ、いま店にしている空き家を見つけました。訪ねてみたら家の雰囲気がいすくしい。それに、アンパンマンミュージアムが近くて人が集まる



献立や料理についてのメモなど
丁寧に書かれたメニュー

おすそわけ食堂まど

香美市香北町荊生野338
Tel.070-8472-4470

高知市から車で約1時間。日替わり定食800円、高校生以下300円。ほかにジビエを使ったカレー、オムライス、スイーツやドリンクなど。テイクアウトもあり。営業時間:11～14時(土・日・祝日は～15時)、17時30分～20時(木・金・土曜のみ) 定休日:月(臨時休業あり)

おすそわけ食堂まどの
Instagramは
こちらから



すやま ちみ 陶山智美さん

鳥取県出身。2021年、高知大学農林海洋科学部農林資源科学科卒業。在学中に農業の現場に触れて、食品ロス問題に関心を深める。4年生のとき、廃棄される野菜を有効活用する「おすそわけ食堂まど」を香美市土佐山田町にオープン。卒業後、同市香北町に移転。子どもの放課後の居場所づくりとして、「いーばしょまど」にも取り組む。

場所なので、ビジネス的にも可能性がある。大学卒業後の2021年4月に移転し、昼と夜の両方で営業するようになりました。もちろん、食材はおすそわけ。近くの農家さんや家庭菜園を楽しんでいる方から、規格外や売れ残り、食べ切れない野菜をいただいています。おすそわけに対しては、

「コーヒーや総菜などでお返し。ほかにジビエを扱っている施設から安い切れ端の肉などを仕入れて、カレーなども作っています。2023年4月からは毎週水曜、「いーばしょまど」という名で、子どもの放課後の居場所づくりも行っています。子どもが放課後に過ごせる場所がないということから、地域のひととチームを組んで運営しています。食堂も居場所づくりも、子育て世代からいい反応をいただいて、「まどが頼みの綱」と言ってくださる方もいます。

独創的な発想と力強い行動力で、地域になくてはならない存在になった「まど」。オープンから4年目、陶山さんはいま何を考え、何を目指しているのでしょうか。

ゆくゆくはフランチイズのようにして、ほかの地域でもやってみたい。後継者を見つけて店を任せ、自分は外で広めたいと考えています。それと、30歳までに1回区切りをつけたという思いも。鳥取にいったん帰って、別のこともやりたいんですよ。動物が好きで、いまもヤギや鶏を飼っていて、動物といっしょに地域の居場所づくりができないかなと



イノシシ肉を使ったジビエカレーも
人気メニューのひとつ

大学生スタッフの
高橋里帆さんと
ヤギのメ



高知県×

次世代地域創造センター 地域DX共創部門

学校を核に取り組む防災で デジタルデバイドを解消



インターネットやパソコン、スマートフォンが身近になった現代。

しかし一方で、デジタルな情報にアクセスできず、情報格差である「デジタルデバイド」が生まれています。

いま、高知大学を含む産学官民連携で、デジタルデバイスで解消に向けた取組が行われています。

「デジ防」の取組は 海辺の町から始まった

「人間というものは本当に困るか、あるいは得るかでないと、なかなか行動に移さないものです。そこで、命に関わる防災をテーマにした『デジタル防災プロジェクト（通称・デジ防）』を立ち上げ、避難行動などに役立つ自治体・行政アプリにアクセスできるようになることを目指しました。そう話すのは、新たな考え方でデジタル技術を活用した仕組みづくりを進める、地域DX共創部門の部門長である川村晶子特任教授です。現在、デジタルデバイス解消のための企画から実践を、高知県デジタル政策課をはじめ県内自治体、民間企業、高知大学生、高校生などとチームを形成しながら進めています。

取組の舞台となったのは、南海トラフ地震で30mを超える津波が想定される黒潮町。「同町の大方高校は、全国でもトップクラスの防災教育を行っています。その知見と組み合わせることで、



佐賀中学校で行われたスマホ教室



日高村で行われたデジ防スマホ教室

デジタルコミュニティ形成が 格差解消のカギ

次にデジ防に取り組んだ自治体は2022年に高知大学と県、民間企業とデジタルデバイスで解消に関する4者協定を結んでいる日高村でした。

「スマホの普及率が全国でもトップクラスの日高村で、大方高校の生徒に連携してもらい、シニア向けのデジ防スマホ教室を2023年に実施しました」と川村先生。大方高校の生徒たちは事前に日高村の実地調査を行い、

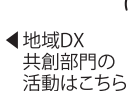
水害の危険が高い地域性に考慮しながらプログラムを組みなおして教室開催に臨みました。「デジ防が目指すのは、顔の見えるデジタルコミュニティ」の形成です。デジタルに対して不安を感じず、使ってみると思ってもらいたい。わからないことを気軽に聞けて、緊急時にデマなどに巻き込まれないような関係性を持ったつながりを作りたいと思っています」



大方高校で行われたデジ防スマホ教室



誰もがデジタルに不安を感じない社会を。



地域DX共創部門の活動はこちら

次世代地域創造センター
地域DX共創部門長
特任教授
学長特別補佐

かわ りん あき こ
川村 晶子

高知県出身。高知大学理学部卒業。富士通株式会社、高知県業務改革推進室などの勤務を経て、2018年に高知大学次世代地域教育センター客員准教授に着任。2022年より現職。その他、総務省電子政府推進員、高知県産業振興アドバイザー、高知県産学官民連携事業創出アドバイザーなどを歴任している。「これからはAIと一緒に未来を作ることができる力を持った人材を輩出することも、高知大学の使命のひとつだと思います」

けん玉がつくり出す コミュニケーションの 不思議にはまる

2023年12月、NHK紅白歌合戦の「けん玉チャレンジ」に参加！そんな稀有な経験を持つ教育学部の福住紀明准教授。しかし、福住先生にとってけん玉は特技や趣味ではなく、れっきとした研究対象です。

「興味をひかれたのは2018年に高知大学に着任してから。ある時、全校でけん玉に取り組んでいる高知市内の一宮小学校を訪問しました。ちょうど休み時間、子どもたちはけん玉をしながら先生と会話をしていたのですが、その様子がそれまで見たこともないような不思議な風景で、とても素敵だったんです。私は学級経営などが専門。子どもたちがより良い学校生活を送るためには

どうすればいいのかを研究していたので、けん玉を介したコミュニケーションで先生と児童がつながっている様子に衝撃を受けました」と福住先生は振り返ります。

けん玉をもっと教育に生かしたい、と考えた福住先生。けん玉を教える資格について探したところ、「一般社団法人グローバルけん玉ネットワーク」という団体が発行する指導者資格「けん玉先生」を知りました。資格を取得できる講座が開かれることを知り、早速参加。その場にいた高知県内で活動するけん玉チーム(103DAMA)のメンバーと話ができて、資格取得とともにチームに参加することになりました。

チームには教員など教育関係者が参加していて、けん玉教室を開いたりワールドカップなどに出場したりしています。私も難しい技を教えて

高知大学 人物図鑑 vol.2

ずーみん先生、けん玉の 魅力を学校で活かす！

ずーみん先生として けん玉遊びの魅力を 届ける

けん玉は昔から、集中力がつく、バランス感覚が養えるなどといわれる玩具ですが、福住先生が目玉しているのはコミュニケーションツールとしての効果です。

「けん玉研究の私のキーワードは、“つながり”です。けん玉の技が成功したらハイタッチで喜び合う。1人でだけでなく、ペアやグループで協力する。友達や先生を応援する。楽しさや喜びを誰かと共有する工夫によって、つながりが生まれます」

学校教育の中でけん玉をどのように使っていくのか。その検証のために2019年から小学校での体験授業を始めました。子どもたちからは

「ずーみん先生」と呼ばれています。さらに、けん玉よりも簡単に遊ぶことができる、筒とボールを組み合わせた「筒けん」も授業で導入。こちらは扱いが容易で、複数でも遊ぶことができるので、その効果にも先生は期待を寄せます。「けん玉も筒けんも工夫すれば、例えば積み重ねて積み木のような遊び方もできたりと、難易度もコントロールできます。子どもに合わせて臨機応変に遊べるのも魅力ですね」

研究の一方で、所属するけん玉チームでも活動を続け、地域で親子けん玉教室を開催するなど、ずーみん先生は引っぱりだこ。紅白歌合戦へのけん玉出演もできました。けん玉の歴史を調べたり、世界各国のけん玉のような玩具を収集したりと、活動はますます広がっています。



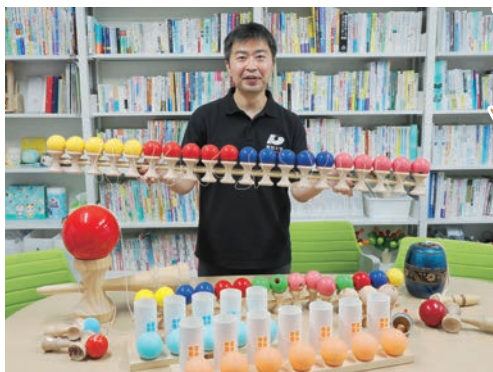
NHK紅白歌合戦の「けん玉チャレンジ」



筒けんで遊ぶ子どもたち

もらったとき、その技ができてしまったので、自分にとびつくり！その教え方がうまいんです。苦手なところはスルーして、できているところをさらに伸ばす。そして褒める！大人になってそう

そう認められる機会も減ったので、褒められてなんか心がポカポカしました。高知に来たばかりで知り合いも少ない中、チームの仲間とはとても温かい存在でした」

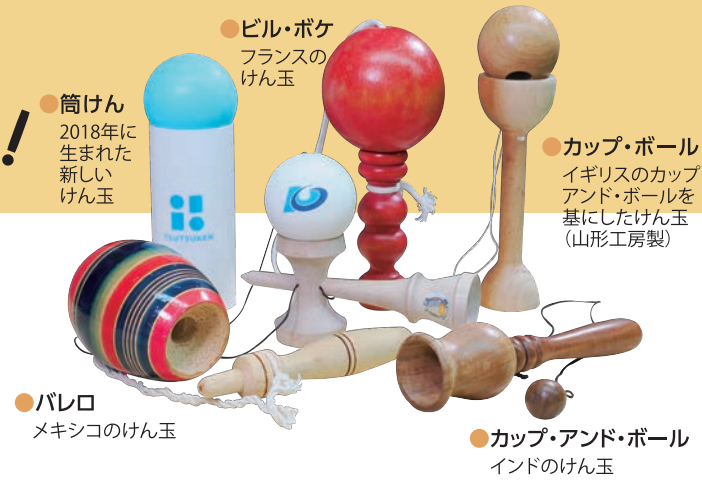


けん玉で
ウェルビーイングを
高めよう！

教育学部 人文社会科学系
教育学部門 准教授

ふく ずみ のり あき
福住 紀明

福井県出身。都留文科大学文学部卒業。同大学大学院文学研究科、東京電機大学大学院先端科学技術研究科満期退学。博士（情報学）。専門は学校心理学、学校カウンセリングなど。早稲田大学非常勤講師、東京電機大学研究員などを経て、2018年に高知大学に着任。日本けん玉協会高知県支部長。「ずーみんは私が大学生だった時の親しい友達から呼ばれていた愛称の1つなんです。だからなつかしい気持ちになります」



●ビル・ボケ
フランスの
けん玉

●筒けん
2018年に
生まれた
新しい
けん玉

●カップ・ボール
イギリスのカップ・
アンド・ボールを
基にしたけん玉
(山形工房製)

●バレロ
メキシコのけん玉

●カップ・アンド・ボール
インドのけん玉

研究室にはさまざまなけん玉や筒けんが並び、そのバラエティは驚くほどです。「各国のけん玉と比べて、日本のものは玉を皿に乗せたり刺したりできるので、技のバリエーションが豊富です。けん玉の進化のプロセスが面白いですね。体験授業では、そんなワクワクする学びのつながりも意識して教えています」

現在は学校だけでなく学童保育や親子向けの研修講座も行い、けん玉の教育現場での活用を促す福住先生。今後の研究については、「体験

授業などでデータが集まってきているので、論文にまとめたと考えています。テーマは、学校でけん玉を活用した場合のウェルビーイング(幸福度)への教育的効果について。その効果の量的側面や質的側面について発表していきたいと思います」

最近では、「技を見せて」とリクエストされることが増えたという福住先生。人目のつかないところでこっそりと練習をしているとか。キャンパスの片隅で、練習に励む姿を見ることができるかもしれません。



体験授業の様子



とさつこタウンでのけん玉体験



高知大学の源流を
たずねて

今年、高知大学は創立75周年を迎えます。
今から75年前の5月、現在の人文社会科学部と理
工学部の前身である旧制高知高等学校、教育学部の
前身であり、陶冶学舎の流れを汲む高知師範学校、
農林海洋科学部の前身であり、高知県立農業補習学
校教員養成所の流れを汲む高知青年師範学校、これ
らが統合して「高知大学」は誕生しました。その後、
2003年に現在の医学部である高知医科大学と統合。
2015年には地域協働学部が新設されました。

改称・統合・新設を経て、刻まれた高知大学の深い
歴史。源流の一つである陶冶学舎の開学は150年前
に遡ります。
今日にいたるまでの高知大学の変遷を、改めて振
り返ります。



2024
高知大学創立75周年



More About

高知大学の流れをさらに詳しく知る

歴史アーカイブサイト <https://75th-archive.kochi-u.ac.jp/>

高知大学の前身である陶冶学舎(とうやがくしゃ)開学時より高知大学のあゆみをじっくり振り返ることができます。サイトは「年表」ごと、または「アーカイブ」として年度ごとに発行された冊子類(大学案内、広報誌バックナンバーなど)や、歴代の学歌、周年誌を閲覧することができます。年表ページでは、大学の節目と世界の出来事をリンクさせながら高知大学の歴史を感じていただけます。ぜひご覧ください。



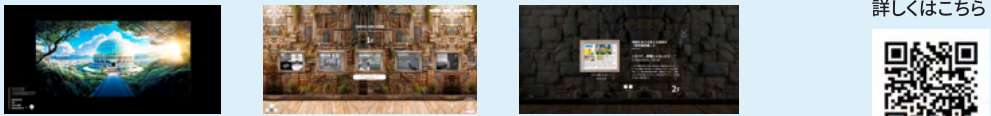
詳しくはこちら



高知大学の研究を知り、未来を考える

未来研究ミュージアム <https://researchmuseum.kochi-u.ac.jp/>

高知大学の研究によって未来の社会を変えていきたい。高知大学が未来に向かって今、どんな研究を行っているかを知ってもらいたい。そんな想いから高知大学の様々な研究を紹介する「未来研究ミュージアム」をOPENしました。誰でも、どこからでもアクセスできるミュージアムの1階では、基幹研究プロジェクト動画、2階は高知新聞で取り上げた研究内容、3階は2006年より高知大学総合研究センターが年に1度刊行する機関誌「高知大学リサーチマガジン」を配置し、本学の研究者の特筆すべき研究成果を紹介しています。



詳しくはこちら



詳しくはこちら



垣根を超えたコミュニティに入会する

高知大学校友会 <https://koyukai.kochi-u.ac.jp/>

卒業生のみならず、地域の皆様など本学とご縁があるすべての方々に入会いただけるコミュニティです。日本の未来を支える現役大学生や研究者などを応援・支援するファンコミュニティとして活動展開するとともに、多種多様なイノベーションを創造する新結合の拠点となることを目指しています。



本学の在学生と卒業生によるバンド
「THE・ステレオギャング」が、エマーゼンザ
国際大会で、世界3位に入賞しました

本学の在学生と卒業生によるバンド「THE・ステレオギャング」が、8月9日～11日にかけてドイツで開催されたエマーゼンザ国際大会で世界3位に入賞しました。

THE・ステレオギャングは、2021年に高知大学軽音楽サークルに所属するメンバー4人で結成されたハードロックバンドです。今年行われたエマーゼンザ・ジャパン2024で優勝&ドイツ連邦共和国大使館賞のW受賞を果たし、ドイツ・タウバートル野外フェスで行われた国際大会に進出し、高い評価を受けました。

THE・ステレオギャングの今後の活動は公式サイトをご覧ください。応援のほどよろしくお願い致します。



公式サイト



エマーゼンザ国際大会(ドイツ)でのメンバーの様子

高知大学が提案した
「しまんと海藻エコイノベーション共創拠点」が
JST共創の場形成支援プログラムに
採択されました

高知大学を代表機関として、京都大学などの学術機関、理研食品株式会社などの企業、四万十市、高知県が科学技術振興機構(JST)の「共創の場形成支援プログラム(COI-NEXT)」に共同提案した「しまんと海藻エコイノベーション共創拠点」が、「地域共創分野(育成型)」として採択されました。

本プログラムは、大学等が中心となって未来のありたい社会像(拠点ビジョン)を策定し、その実現に向けた研究開発を推進するとともに、プロジェクト終了後も、持続的に成果を創出する自立した産学官



左から 本家理事、受田学長、平岡教授、
四万十市 中平市長、難波准教授

共創拠点の形成を
目指す産学連携プ
ログラムです。

高知大学は、四万十市における海藻生産の壊滅的な減少に対し、持続可能な陸上養殖を基盤として海藻生産の再生を目指し、地域課題の解決に取り組めます。

高知大学のラジオコーナー

FM 高知 81.6MHz
「Monthly 高知大学」【毎月】第4金曜日10時15分～

高知大学の教育・研究・地域貢献等の情報をFM高知でお届けしています。ラジオ聴取用アプリ「Radiko」をダウンロードしていただく、スマホやパソコンで全国どこでも視聴していただけます。

高知大学たんねる舎 ～いつまでも学びたい、を応援するラジオ～

この番組は、いつでもどこでも、いつまでも楽しく学び続けていきたい皆さんを応援します。「たんねる」は幡多弁(土佐弁)で、「調べる」、「探究する」、「訪れる」という意味。「たんねる舎」は、「知を探究し、知を訪れる学びの場」という想いが込められています。

盛山正仁文部科学大臣らが本学を視察されました

7月18日(木)に盛山正仁文部科学大臣、伊藤学司文部科学省高等教育局長が本学を訪れ、受田学長らによる本学の概要説明や特徴的な取組説明の後、医学部附属光線医療センター、IoP共創センター教育用ハウス、海洋コア国際研究所を視察されました。盛山大臣からは、地域とのつながりが深く、存在感の大きい、地域経済に貢献している大学であるなどのコメントをいただきました。



前列右から、伊藤文部科学省高等教育局長、
盛山文部科学大臣、受田学長、津江理事、
後列右から、井上医学部長、大淵理事、本家理事、花崎附属病院長



IoP共創センター教育用ハウスでの視察の様子

台湾6大学との日台大学地方連携及び社会実践連盟における
会長交代式と拡大首脳会議に参加しました

2024年9月13日(金)・14日(土)に台湾台中市で日台大学地方連携及び社会実践連盟の会長交代式及び拡大首脳会議が開催され、本学から遠藤理事(総務・企画・危機管理担当)、次世代地域創造センター赤池慎吾准教授、岡村健志准教授が参加しました。また、会長交代式には、受田浩之学長がオンラインで参加しました。

本連盟は、2021年に発足した本学をはじめとする日本の4大学(高知大学、信州大学、千葉大学、龍谷大学)と台湾の6大学(国立臺南国際大学、国立成功大学、国立中山大学、東海大学、国立高雄科技大学、国立台湾海洋大学)による地方創生をテーマにした連盟です。

9月13日には、8月に初代会長(国立臺南国際大学学長)及び副会長(高知大学学長)の任期が満了したことに伴い、会長の交代式が行われました。この9月から2年間は、本学の受田学長が会長に、そして国立台湾海洋大学の許泰文学長が副会長に就任し、本連盟の第2期を牽引していきます。

9月14日には、遠藤理事(連盟会長代理)を議長とした拡大首脳会議が開催され、今後の本連盟の更なる発展・拡大について活発な意見交換が行われました。



国立臺南国際大学から高知大学へ会長交代の様子

入試・イベント情報

「出願直前!オンライン学部説明会・個別相談会」開催! 2025年1月27日(月)～31日(金)
各学部の説明や入試に関する個別相談を実施します!
詳細や申し込みについては受験生サイトから <https://nyusi.kochi-u.jp/>

試験日程 共通テスト:1月18日(土)、19日(日) 前期日程 試験日:2月25日(火)、26日(水)
〈一般選抜〉 出願期間:1月27日(月)～2月5日(水)〈必着〉 後期日程 試験日:3月12日(水)

放送中



「高知大学マガジンSRU」
アンケートご協力をお願い

アンケートにご協力いただいた方の中から抽選で3名の方に高知大学オリジナルグッズをプレゼントします。(当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます)

回答期限:令和7年2月28日



こちらを
チェック▼



YouTube、Podcastで配信中!



2022年～2024年 高知大学は創立75周年記念事業を実施しています

2022年 旧制高知高等学校開設100周年

5月14日 高知大学創立75周年記念事業キックオフイベント

10月 1日 第1回 記念シンポジウム in 須崎市
「LXで切り拓く持続可能な地域づくりへの挑戦」

10月30日 学生支援チャリティーイベント GIVING CAMPAIGN 2022

高知新聞で
毎月第4火曜日に
連載中! 見てね!高知新聞特集企画
「地域を支える変える高知大」本事業への
ご寄附はこちらから

2023年 高知大学と高知医科大学の統合20周年

1月21日 第12回ホームカミングデー (オンライン・ライブ配信)

第2回 記念シンポジウム
「「共感」から生まれるコミュニティで人は幸せになれる～
創立75周年を契機に「共感」で溢れる高知大学に～」

3月18日 第3回 記念シンポジウム in 梶原町 「持続可能な地域づくりは土佐の山間よ!」

6月19日 GIVING CAMPAIGN 2023 Spring

7月15日 第4回 記念シンポジウム in 高知市
「絆の躍動!よさこいらんまん2023～なぜ、高知大学は演舞場を開設するのか～?」

8月10日・11日 よさこい祭り 高知大学演舞場を開設

10月 7日 第5回 記念シンポジウム in 四万十町
「最後の清流四万十川と共に豊かな暮らしを続けるために」

10月30日 GIVING CAMPAIGN 2023 Autumn

11月 3日 高知大学校友会 設立総会

11月 4日 第13回ホームカミングデー (朝倉キャンパス)
第6回記念シンポジウム 「俳句のある人生」 夏井いつき氏

11月25日 高知大学と高知医科大学の統合20周年記念式典



2024年 高知大学創立75周年 南湊寮開寮100周年 陶冶学舎開設150周年

3月24日 第7回記念シンポジウム in 須崎市
「「海のまち須崎」未来への挑戦～
「逆参勤交代」×「釣りバカ」から生まれる持続可能な地域づくり～」

8月10日・11日 よさこい祭り 高知大学演舞場を開設

9月28日 研究成果報告シンポジウム
「未来研究ミュージアム～冒険の扉を開こう～」

高知大学創立75周年記念 エンターテイメント型式典

2024
11/3

高知大学 気高心躍る年に



よさこい、ダンス、スピーチ…渾然一体のエンターテイメント型式典!!!

これからも、Super Regional University 地域を支え地域を変えることができる大学を目指して

